

---

# 魔女になる

オードリー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔女になる

### 【ZPDF】

Z83000

### 【作者名】

オーデリー

### 【あらすじ】

祖母は、魔女だった。祖母のやり残した仕事を終えるため、連れてこられたのは、異世界の国、サンフュースタ。ロバになつた王子や木こりになつた騎士と繰り広げるお伽噺な日々。

ロバになつた王子1（前書き）

プチ連載です。

## 口パになつた王子1

魔女の力は、絶対だ。

特に年を取つた魔女の力を侮つてはいけない。

その眼は、全てを見通す力がある。

祖母は、魔女だつた。

いつから魔女だつたのか。

どうして魔女になつたのか。

良い魔女だつたのか。

悪い魔女だつたのか。

死んでも魔女のままなのか。

そんな馬鹿げた質問は、もうできないのだけれど。

魔女になる

先月、変わり者と評判だった祖母が亡くなつた。

祖母は、祖父が亡くなつた後、すすき野原の中を続く一本道の先にある小さな家でずっと一人で暮らしていた。

祖母は、息子である私の父親にすら、数えるほどしか家の敷居を跨がせなかつた。

祖母の生前、私がその家を訪れたのは、一度きりだ。

家の中にスパイシーな香りが漂つっていた。

私は、確かに前にもその香りを嗅いだことがあつた。  
けれど、どこで嗅いだのかは全然思い出せなかつた。  
私がただが違つた。

私は、確かに前にもその香りを嗅いだことがあつた。  
けれど、どこで嗅いだのかは全然思い出せなかつた。  
そのことを告げると、祖母は、微笑を浮かべた。

私がそう言った時から、祖母には、全てが分かつていていたのだと思つ。

四十九日が終わつた後、私は、遺品整理をするために祖母の家を訪れた。

私の家族を含めた親戚のほとんどは、祖母の家を気味悪がついていた

ので、誰も祖母の家に入りたがらなかつた。

どうせ、大した遺産もないのだから、誰が行つても変わらないだろうということで、暇な大学生である従兄弟と私がかりだされことになつた。

秋晴れの日曜日、従兄弟にドタキヤンされた私は、一人で祖母の家へ向かつた。

電車を降りて、しばらく歩くと、すすき野原が見えてきた。  
日の光を浴びるすすきは、金色でもなく銀色でもない不思議な透き通つた色合いをしていた。

祖母の家は、都心からさほど離れていない。

こんな立派なすすき野原があるのに、どうして、観光客が一人もいないのだろう。

訽然としない気持ちを抱えたまま、私は、祖母の家に足を踏み入れた。

一体、誰がこんな風に魔法が働くと予想できただろうか。

呪文も派手な音も煙もなし。

実際に洗練されていた。

換気しようつと思い、カーテンをひいた私は、絶句した。

窓の外に見えるのは、すすき野原ではなかつた。

生い茂る木々。

イリュージョンかしり。

私は、目をこすつた。

それから、カーテンを一度閉めてから、もう一度開けた。

眼前の光景は、変わらない。

私は、玄関へ行き、外に出てみた。

やつぱり、すすき野原ではない。

鬱蒼とした森は、まるでお伽噺に出てくる魔女の棲み家のようにだ。

ふらふらした足取りで、家の中に戻ると、居間のテーブルの上に分厚い封筒が置いてあるのが目に入った。

こわい。

れつまは、封筒なんか、なかつたはずなのに。

宛名は、ちゃんと私の名前が記してあつた。

おやおやおや、封を切つて、封筒の中に入つていた手紙を呼んだ私は、その内容に絶句した。

手紙には、祖母が魔女だったこと、異世界で祖母がやり残した仕事を全て終えたら、私を繋ぎとめる魔法が解けること、その他こまごまとした指示が書いてあった。

とんでもない話だ。

テーブルに突っ伏して呻いていると、玄関の呼び鈴が鳴った。

早速、件の依頼人がやってきてしまったようだ。

居留守をしてしまおうとかという考えが頭をよぎった。

でも、仕事を終えなければ、一生祖母の魔法が解けず、家に帰れないかもしれないのだ。

私は、祖母の手紙に同封されていたペンドントを首に引っ掛けると、ドアノブを回した。

あ、怪しい。

ドアの前には、明らかに不審な人物が立っていた。

真っ黒なマントを着て、フードを目深に被っていた。

身長と体格から、男性だと判断がつくだけで、あとは全く正体不明だった。

まあ、魔女に仕事を依頼するくらいだから、訳ありなのは、当然か。私は、なんとか気持ちを奮い立たせた。

「ト力さんですか」

手紙に記されていた依頼人の名前を告げると、男は、頭を縦に振つた。

祖母の翻訳ペンドント（仮称）がきちんと作動したので、少し安心した。

はじめに言葉ありき、だ。

私は、男を居間に招き入れた。

お茶を出すと、男は、ありがとうと言つた。

意外と、若々しい声だつた。

フードを脱いだ男の容姿を見た時は、正直ぎょつとした。顔は、毛深く、頭には、馬よりも長い耳がついていた。

男の顔は、ロバにそつくりだつた。

いや、ロバそのものだつた。

まるで、ピノキオ、いや、ボトムか。

じろじろ見つめて氣を悪くされても困るので、視線を外すと、ペンドントと同じく手紙に同封されていた契約書を男に手渡した。

祖母が亡くなつたことを告げると、男の顔に絶望が浮かんだ。

私は、すかさず、祖母からの指示通りの言葉を述べた。

死んだ祖母の代わりに、孫である私が男にかけられている呪いを解くこと。

ただ、私は、魔女として半人前なので、時間がかかること。

男は、顔を上げると、私をじっと見つめた。

信じていいのだろうか。

ロバの顔をした男の瞳は、そう語っていた。

半人前どころか、魔女の存在すら信じてなかつたなんて言つたら、泣き出しそうだな。

「出来る限りのことはしますよ、トカ王子」

私は、重々しく言つた。

私の最初のお客は、王子だった。

しかも、ロバになった王子だ。

トカ王子は、今までの経緯を語り始めた。

私が今いる祖母の家は、サンフエスタといつ国の中にはあり、トカ王子は、この国の王子様だということだ。

トカ王子の本来の姿は、大層美しいらしい。

トカ王子は、恋多き男で、お相手は、貴族の令嬢から町娘におよび、  
とつとう魔女にまで手を出した。

王子に恋した魔女は、若く、純粋だったから、王子の心変わりを知  
つた時、烈火の如く怒り、王子に呪いをかけた。

結果として、王子は、ロバになつた。

「自業自得じゃないですか」

ロバになつたアルフレッド王子の口から正真正銘のお伽噺を聞いた  
私は、呆れ返つてしまつた。

「恋は、必然だつた。アナスタンツィアは、美人なのだ」

トカ王子は、テレッとした。

アナスタンツィアといつのは、王子がたぶらかした魔女の名前によつ  
だ。

「あの、反省します?」

皮肉を込めてたずねると、王子は、キヨトンとなつた。

「なぜ、反省しなくちゃいけないんだい」

「本氣で好きでもない女性に言い寄つたからにきまつてゐるでしょ  
う」

「心外だな。僕は、どの女性のことも本気で愛していた」

王子は、少しムッとしたよつて言ひ返してきた。

私は、軽く眩暈を覚えた。

王子様は、根つからの浮氣者だ。

私は、苛立ちを治めるためにお茶を飲んだ。

「つまり、あなたは、自分の非を認めていなければね」

「ああ、もちろんだ。人の心は、変わるものだ。アナスタンツィアに呪いをかける権利もない」

王子は、いけしゃあしゃあと言ひ切った。

「もう一生口バでいればいいんじゃないですか」

「どうして、そんな冷酷なことが言えるんだ」

冷たく言い放つと、ロバづらの王子は、大きな黒い瞳でぱちぱちと瞬きした。

王子は、本気に私が怒っている理由がわからなによつだつた。

王子様だから、きつと叱つてくれる人もいなかつたんだ。

誰も本当のことを言ひてくれなかつたのだ。

私は、急に目の前の人気が可哀想になつた。

祖母も、きっと情状酌量の余地はありそつだから、依頼を引き受けたのだろう。

私は、こほんと咳払いをした。

王子の呪いの解除方法は、祖母の手紙に書かれていたのだ。

「魔女の呪いは、絶対です。呪いは、しかるべき手順で解かなければなりません。そして、始めに断つておきますが、呪いを解くためには、あなた自身が呪いに打ち勝たなければならないのです」

「いいから、解除方法を教えてくれ」

王子は、少し苛々したように言った。

「では」と、私は言葉を続けた。

「あなたが恋したといつ全ての女性に会いに行つていただきます」

王子は、すくなく嫌そうにいなないた。

「なんで、僕がそんなこと。彼女達との恋はもう終わつたんだよ」

「いいえ。まだ、終わつていなんですね」

突然、王子は、テーブルをドシンと叩いた。

「馬鹿げたことだ。魔女だつたら、さつさと呪いを解いてみせる。まだ、半人前だから、できないのだろう」

逆上した王子は、明らかに動搖していた。

「否定はしません」

私は、正直に答えると、王子を真っ直ぐ見据えた。

「私と一緒に女性達に会いに行く」と。それができなければ、私はあなたの呪いを解くことはできません」

「もういい。お前なんかに頼るものか」

立ちあがつた王子は、ドアをバンと叩きつけるように閉めて、出て行つてしまつた。

気が抜けて、思わず、ふうとため息をついた。

王子は、さつとまたやつてくる。

ここに腰を据えて、気長に待つしかない。

森の夜は、静かで、かすかにフクロウの鳴き声が聞こえた。

私は、祖母の家を漂うスペイシーな香りに包まれて眠つた。

懐かしい香りのおかげで、不思議と怖くなかった。

カーン、カーン。

景気よく響く音のせいで、目が覚めた。

ベッドから出て、窓の外を見下ろすと、少し離れたところに一人の男が見えた。

背の高い男は、大きな大木に斧を打ちこんでいる。

いわゆる、木こりってやつじゃないか。

もしかしたら、『近所さんかもしけない。

食糧事情とか、聞いておきたい。

祖母の部屋にあつた花柄のドレスを着た私は、祖母の翻訳ペンドント（仮称）をかけると、外に出た。

「あの、」

声を掛けると、男がこちらを振り返った。

男の顔を見た時、私は、内心、おおと感嘆の声を上げた。

若い男だ。

端正な顔立ちをしていて、美人といつてもいい程だった。

程良く引き締まつた体をしていて、労働のせいで、頬を伝つ汗が、なんともセクシーだ。

日本の大学では、ちょっとお田にかかるないワイルド系の男子だ。

見惚れていると、男が先に口を開いた。

「なにか、用か」

「ぶつきらぼつだけど、嫌な感じはしない。

王子様がロバづらだつたのは、がつかりだつたけれど、美形の木こりといつのも意表を突いていて、悪くない。

「私、昨日この森に引っ越してきたばかりなのですが、この近くに買い物できそうな町とか村はありますか」

「引っ越しきたつて、この森に？ 一人で？」

男は、少し面食らつたように私を見下ろした。

瞳の色は、淡いブルーだ。

「はい。祖母の家業を継いだんです」

「悪い」とはいわないから、やめておけ。この森には、魔女が住んでいるぞ」

男は、布で汗を拭うと、近くの切株の腰を下ろした。

私も男の隣の切株に座つた。

「心配には及びません。ところで、あなたは、この近くにお住まい

なんですか」

「ああ。少し歩いたところだ。しかし、魔女の話は、本当だぞ。ほら、あそこに見える家が魔女の家だ」

男の指差す方には、さつき私が出てきた家が見えた。

見上げると、ブルーの瞳には、心なしか、愉快そうな光が浮かんでいる。

これほど、美しい男だ。

案外、いつも「いやつて、女性を遠ざけているのかもしれないな。

私は、にやつと笑つて見せた。

「大丈夫ですよ。あそこは、私の家ですから」

ドサッといつ音がした。

男が驚いて、切株からずり落ちたのだ。

私は、立ち上がると、男に手を差し出した。

「そんなに驚かないでください。魔女といつても、半人前ですから」

男は、少し躊躇つたが、私の手を取った。

再び、切株に座りなおした後、男は、私をちらりと見た。

「若いんだな。前の魔女は、老婆だったが、

「さつき、私の祖母だと言つたじゃないですか。魔女が全員、年寄りだと思っているなら、大間違ですよ。よくは知りませんけど、人間に恋する若い魔女もいるらしいですから」

男が引き攣つた表情を浮かべたので、苦笑してしまった。

サンフェスタの男達は、どうも恋愛不信が多いようだ。

「取つて食つたりしませんよ。それより、町とか村とか日用品が買える場所を教えてください」

私の冷静な言葉を聞いた男は、少し照れくさそうに頭を掻いた。

「ああ、そうだったな。向こうの川を北にたどつて、街道に出て、半日歩いたところに村があるぞ」

「半日ですか！？」

「女の足だと、一日かかるかもな。空飛ぶ箒とか持っていないのか」

「本当にそんな便利なものあるんでしょうかね」

「お前、本当に魔女？」

「魔女の血は引いてますけど、魔女かといわれれば、微妙ですね」

「せつや、半人前だと嘗つただろ」

「いや、10分の一人前といふか」

可愛らしく、ガシンと頭を叩いて見せると、男は、思いつきついに顔をした。

「お前、野たれ死んだりしないよな」

「家の戸棚に缶詰とか残つてましたから、当分は持つと思つます。いざとなつたら、木の実でも探ししますよ」

男は、はあと深いため息をついた。

「もういい。明日、俺の馬で村まで乗せていいでやるから、半月に一度、この近くに乗合馬車を回してもうんづかん頼んでおけ」

「女性が苦手なのかと思つてましたけど、面倒見がいいんですね」

「苦手だ。でも、野たれ死にさせるのは、夢見が悪いからな」

男は、やつ言つと、木の伐採を再開した。

「お前を教えてください」

「マシコトだ」

男は、振り返らずに答えた。

「あつがとうござります、マシコトさん。私の名前は、ミヂリです。」

覚えておいてくださいね

私は、たくましい背中にお礼を言つと、「魔女の家」に足取り軽く  
帰つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8300o/>

---

魔女になる

2010年11月10日21時46分発行